

座長コラム「長岡の風」

第12回 2024年10月

「和を以て貴しと為す」

長岡経済・産業連携会議 座長：高野裕

①保証協会の数字から

今日の会議で資料を見ながら考えた。新規の保障申込数が前年同期比で83.8%、利用件数が2割ほど少なくなっている。さらに、代位弁済の件数は前年同期比90.6%。代位弁済だから借入金の返済がかなわず、本人は破綻してしまい、本人に代わって保障をする保証協会が、その借入金の弁済をするという数字だ。その件数というか口数が前年同期比で9割。新規の保証申込が8割で、代位弁済が9割ということは、申込口数の減少ほど代位弁済の口数は減少していない、すなわち、破綻しているところはまだそんなに減少はしていない。だから新規申込の減少よりも破綻の減少が少ないとすれば、経済の活力は、まだまだ立ち上がっていないといえる。

②淀み

そんなことを考えていたら、とある会議メンバーが、金融機関の借入残高も減少していると話してくれた。さらに、他のメンバーは「二極化」していますよと話す。きちんと計画的に対応しているところは、設備投資などの投資はきちんとおこなっている。目先にとらわれているところは、人手不足などや後継者不在などで廃業や倒産などという流れがみえる。いわば、川の本流にいる企業は積極的な対策を採っているが、淀みにいる企業は思い切った策が取れず停滞している、そんな姿が見える。

③延命策

最近考えるのだが、なぜ日本が世界の中で遅れをとってしまったのか、なぜ世界はどんどん進んでいるのに、日本だけが停滞しているのだろうか。あのバブルがはじけた後、日本は赤字国債や建設国債を発行して公共投資にお金をばらまいた。その結果、日本の国債残高は膨張し、企業も補助金や助成金に依存する形で経営を維持。このような「延命策」が、企業の自己改革を遅らせ、技術や知識の更新が進まなかった要因なのではないか。

④リスクリング

さらに、ベテラン社員が「延命策」の一環で重要視されてきた一方で、若い世代が新技術や知識を生かして活躍する機会が少なかった。その結果、ベテランが引退する今、企業自体が存続危機に直面している。また、遅まきながら「リスクリング」などと対策が進められているが、既に他国は次のステージに進んでいる現状では、すでに追いつくことが難しい。

⑤調和

日本は新しいことに対して、どうしても風当たりが強く、守りの姿勢が根強い。この傾向は、政治が既存の弱者を保護することに重点を置くことになり、新しいチャレンジは必要だとして改革を打ち出しても、結局現状維持レベルに引っ張られる。日本の「和を以て貴しと為す」という価値観は、一面では調和を生むが、その結果、変革を阻む要因ともなっている。

進んでいる企業は必要な人的または物的投資をおこない、変革に対応している一方で、目先の課題に追われる企業は、人手不足や情報化への対応に遅れ、競争力を失いつつある。